

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「不注意傾向のある子ども」

知能検査の依頼を受けたとき、子どもの困り感の背景を多面的に探るため、「SEN児童生徒チェックリスト」をお願いしています。以前、検査を実施すると、ワーキングメモリに課題のある子どもが多く、学習の定着に影響していることを紹介しましたが、チェックリストを実施すると、「不注意」に該当する子どもが多くいます。一般的に不注意傾向は女子に多い、気付かれにくい、成人してからその特性は続くといわれています。ワーキングメモリ機能とも深く関連している「不注意」について考えてみます。

【不注意の4つの種類と困り感】

- 持続的注意～特定の対象に、一定時間注意を持続させる力** **いつもボーッとしている**
 - ・1つのことを続けられず、すぐ飽きる。(疲れやすい)
 - ・話を集中して聞くことが難しい。(聞き漏らしや聞き間違いが多い)
 - ・話しかけられているのに、聞いていないように見える。(上の空のように見える)
- 選択的注意～複数の物の中から必要な対象を選んで注意を向ける力** **すぐに気が逸れる**
 - ・片付けの際、何から片付ければよいかわからず迷う。(課題を順序立てて行えない)
 - ・何を食べるか、決められず迷ってしまう。
 - ・外的刺激によってすぐに気が散ってしまう。
- 配分的注意～複数の対象に同時に注意を向ける力** **細かい部分まで注意を払わない**
 - ・文字の読み間違いや書き間違い、計算のミスが多い。
 - ・サッカーやバスケットなど球技が苦手である。
 - ・話を聞きながら、同時に板書をノートに書き写すのが難しい。
- 転換性注意～注意を向けた対象から別の対象に注意を切り替える力** **必要な物をなくす**
 - ・目の前の活動に気を取られて、他の活動ができない。
 - ・鉛筆や消しゴム、リコーダー等の物をよくなくす、忘れ物が多い。
 - ・物を置いた場所を忘れてしまう。

【不注意傾向のある子どもへの支援】

- ・掲示物や音など、周囲の刺激を減らす。(子どもの周囲に不必要なものは置かない)
- ・先生の近くや教室の前方に席を移動する。
- ・説明を短く区切り、5W1Hを明確にする。
- ・消えない視覚情報と聴覚情報の両方を併用する。
- ・1回の活動時間を少なくして、こまめに休憩や動きのある活動を入れる。
- ・身振り手振りを交えたり、声に抑揚をつけて楽しく伝えたりする。
- ・全員に伝えた後、その子だけに個別にもう一度伝える。
- ・授業の途中で分からないところがないか確認する。(机間指導で言葉を掛ける)
- ・やるべきこと、手順ややり方を書き出して、一つずつ順番をつけてから取り組む。
- ・大事なことは、こまめにメモを取る習慣を身に付ける。(スマホの便利な機能も活用する)

支援は周りの気付きと、本人の自覚により始まります。不注意傾向があり、困っている子どもがいるかどうか、注意深く観察しましょう。



とれたて直送便



「子どもの名前を呼んでいますか？」

自分の名前は最も気持ちのよい音（最も聞きやすい音）だと言われています。不注意傾向のある子どもには、「〇〇さん」と名前を呼んで、注意喚起をしてから話し掛けましょう。人は親しみを込めて名前を呼んでくれる相手に好意を抱きます。